森と海からの手紙

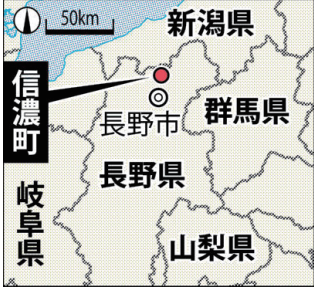
★9便★

# 新しい風 吸収し未来へ

## 入植地 厳しい環境で開墾

黒姫山（2053㍍）が3度冠雪すると、この地も根雪になる――。長野県信濃町にある富が原地区で語り継がれてきた教えだ。

12月半ば。志賀高原の山並みから昇る朝日を望む富が原は、白い世界に包まれていた。標高700～900㍍。年間平均気温は11度。C・W・ニコルさん（享年79）が、森の再生を手掛けた「アファンの森」はその一角にある。



開拓当初は人力で畑を耕していた＝いずれも富が原70周年記念事業実行委員会提供

「掘り返すと、縄文時代の土器のかけらが出てくる」というこの地は、戦前はアカマツの天然林と、里にある集落の草刈り場だった。それが、敗戦の年の11月に「食糧難と外地からの復員者の就労確保」を掲げた「緊急開拓事業」が閣議決定され、入植地に指定されたことで一変した。

第1陣として68戸が入植したのは翌1946年春。重機はもとより牛馬もおらず、万事人力頼り。木の根を抜き、石を掘り起こして、荒涼たる大地にくわを入れ続けた。

「食物も着物も家にも不自由しましてね。困窮の中で離農者も出て、ブラジルに移民した家族もいました」。3年後、「入植2世」として産声を上げた清水岳美さん(73)の述懐だ。

父（同66）は里の農家の長男だったが、画家を志して41年に中国に渡った。大陸を転々としながら絵描きを続け、戦況悪化で帰国。留守宅を支えた弟に家督を譲り、第1陣として入植。ほどなく、茨城出身の母（同97）が嫁いできた。

「家は、伐採した木を使った掘っ立て小屋でした。隙間だらけで、家の中に雪が白く積もってね。田んぼを開墾するまでは、米は食べられず、そばがきばかりでした。そのせいか、今もそばが苦手です」

「栄養不足で、姉は生後間もなく亡くなり、2人の弟は死産と流産でした。弟の亡きがらを背負って火葬に行く父の後ろ姿を覚えています」

炊事洗濯は沢水を使い、暖は掘りごたつ。真冬の沢水は刺すように痛かった。便所は離れた所に穴を掘り、周りを囲んだ。水汲みと焚き付け集め、ランプのほや磨きは子供の仕事だった。

電気がともったのは小学2年の時で、小5で水道が敷設された。64年東京オリンピックの頃は、各戸にテレビも普及した。戦後のベビーラッシュで、地元の小学校の同級生は2クラスで70人を数えた。

「風呂を沸かすのは手間も薪もいるので、隣近所で『もらい湯』をしていました。湯から上がると、上がり込んでテレビのプロレス中継にくぎ付けになったものです」

富が原の外れから学校までは子供の足で1時間近くかかった。吉田健一さん(72)もそんな一人だった。

「雪が降ると、親たちは総出でかんじきを履き、隣家まで雪踏みをしていました」「ワラビやフキを摘んで持ち寄り、学校の図書館の本代に充てたこともあったなあ」「道草は当たり前。山ブドウやアケビがおやつだった。休日には、イワナ釣りやカジカ突きをして遊んだね」

夏は蛍が乱舞、秋は赤トンボが波打ったのが、往時の情景だ。

雪のない時期は毎日のように畑に出る渡辺志げ子さん

緊急開拓事業では、21万1000世帯が全国の開拓地に入植したが、営農は困難を極めて、事業が終了した75年には9万3000世帯に減少した。富が原も入植2年目の74世帯をピークに、80年代後半には37世帯まで落ち込んだ。開拓1世の大半が亡くなり、話を伺えたのは渡辺志げ子さん(92)だけだった。

「名古屋の軍事工場で空襲に遭って、焼け出されてね。何年かたって、名古屋時代の知り合いに勧められて入植したけど、苦労しっきりだ。国は『米作れ』『やれ、陸稲だ』『蚕だ』と口ばかりで、借金こしらえて往生したさ。だから、4人の子供には跡を継げとは言わなかった」

「父ちゃんかい？　70歳で逝ったよ。今が一番幸せだね。1人暮らしは気兼ねもいらないし、畑で野菜や花を育てるのが楽しみさ。草刈り機だって使えるよ」

数年前から冬は長野市内の長男宅で過ごしている志げ子さん。お土産にもらったカボチャが甘かった。

そして戦後77年を迎えた2022年、持続可能な地域運営の仕組みづくりを模索して、富が原に「未来創生会議」が発足した。メンバーは清水岳美さんや、平成以降の移住者とアファンの森のスタッフら総勢9人。眺望や自然環境を求めて移住者が増加し、戦後の入植開始2年目の74世帯までV字回復した地域ならではの、新たな試みだ。

「そもそも、富が原は全国から人が集まった場所で、『よそ者』と『在の者』の区別意識がありません。だから、若い世代や外部の意見や知恵もどんどん取り入れて、未来を育む新しい風を吹かせたと思います」

入植2世の岳美さんの思いである。

【客員編集委員・萩尾信也】

＝原則毎月第3火曜掲載